

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

総合コメント・討論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之, 尹, 紹亭, 周, 星, 武内, 房司, 覃, 溥, 謝, 沫華, 吳, 偉峰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008873

総合コメント・討論

塚田（座長） 本日の最終セッションであります総合コメントと討論に移らせていただきます。国立民族学博物館の塚田が司会を務めさせていただきます。

まず、3名の先生にコメントをいただきます。尹紹亭先生、周星先生、武内房司先生の順でお願いいたします。

尹 このようなシンポジウムに参加できまして、大変うれしく思います。朝から広西、雲南の専門家が、またこのコメントに参加する先生方のご発表なさいました。私もたくさん学ぶことができました。

最初にお話ししたいのは、今日皆さんとこのように議論していますが、みな中国の専門家です。例えば周星さんと私はすでにお互いに知り合いですし、中国の状況もよく知っておりますが、参加なさっている皆さんも中国の西南少数民族についての専門家です。ですから、私たちは対話の基盤があるということです。中国から来られた3名は、それぞれ異なったところでいかに博物館を建設し、それを改修し、文化を守っているかということについてお話しく下さいました。そこで感じたことは、創造性が高いということです。なぜ創造性が高いかと言えば、最初にあげるべきは、中国の現在の文化の状況です。それを理解して初めて、今、なぜ彼らが日本の博物館と違うことができるのかがおわかりいただけると思います。

すでに博物館は、今までの範囲を超えたいろいろな新しい模索をしています。今朝、塚田先生は、資源としての文化など3つの面についてお話しく下さいました。資源としての文化を語ることは、今、非常に重要だと思います。まさにタイムリーな話題だと思います。

中国の状況を見てみましょう。皆さんも、すでにご承知でしょう。建国後、文化大革命を経て、改革開放に至る前、政府の文化についての認識にはいくつかの特徴がありました。文化は封建的な「四旧」のうちの1つとされ、例えば宗教文化など排除されなければならないものが多いと言われていました。

1970年代、80年代に入りまして、市場経済の発展が始まり、社会の文化に対する認識に変化が生じました。過去に、遅れているとか、封建迷信と見なされた文化の多くが一躍資源になりました。すなわち文化は商品経済の中での資源になりました。そこでの1つの顕著な特徴は、資源として民族文化の保護と活用することに他ならなかったことです。

伝統文化、民族文化をつくるにしろ、保護するにしろ、文化の創造者であるそれぞれの民族が欠かせません。文化資源の保護には、政府、学者、企業の参加が必要です、と

りわけ現地の住民の参加が必要です。文化を保護し利用するさまざまな役割をする人たちの中で、学者は往々にして比較的受け身であるように見受けられます。政府が主導し、権利があります。企業や商人は力を持っています。それに対して学者は権利も経済力もありません。発言も軟弱で無力です。とはいえ、学者の意見と批評はやはりとても重要です。他の人にはまねのできない価値と意義を持っています。

2つ目は、現在の文化資源が市場経済と結びついているということです。簡単に申しますと、数年前に「文化が舞台を組み、その上で経済が芝居をする」という言葉がありました。それは文化を利用して利益を求めたり、経済の発展を促進することです。今はこの言葉はあまり使われなくなりました。というのは多くの学者が批判をしたからです。最近流行している言い方は、「文化産業を発展させること」です。現在は経済だけではなく、文化も産業になってきたのです。文化と経済との結合はますます密接になる傾向にあります。

さらに、文化資源の開発と活用に加えて、イメージを作り大々的に宣伝をすることが重視されています。文化が市場経済の下で価値を持つものと見なすがゆえに、独創的な構想や方法で大いに実行に移しているのです。例えば知名度を高めるために雲南の中旬はシャングリラと改名しました。プーアル茶は、もともとは名声が大きくなく生産規模の小さいもので、雲南の国境地域でつくられる普通の茶葉に過ぎませんでした。しかし、今は違います。プーアル茶は大いに宣伝され、イメージが作られ、名声が高まり、すでに世界でも著名な歴史のある文化的な名茶になりました。

3つ目は、文化の創造の真実性の問題です。なぜ真実性を強調するかと言えば、偽物が多すぎるからです。商品の取引には劣悪な偽物が最も嫌われます。商品文化、パフォーマンス文化もまた大衆の愛顧を得るため力を尽くしてその真実性を宣伝し標榜します。商人や企業家はこの面で私たち学者よりも敏感で聡明です。例えば麗江の納西族の古楽は、人生経験の豊富な、長いひげをたくわえた老人たちが意を尽くして演奏します。彼らの演奏自体は若者の演奏よりも上手ではありませんが、老人たちの姿勢が「真実」のように見えるのでそれに感動するのです。先ほどふれたプーアル茶と同じ理屈です。さらに、雲南の楊麗萍が最近東京で「雲南印象」の公演をしました。彼女はそれを「原生态の文化」として宣伝しました。「原生态」はその公演の最大の売り物だったのです。

4つ目は、現代の科学技術を文化に大量に応用したパフォーマンスです。現代の科学技術を応用し、音・光・電気を応用して舞台における演出効果を高め、現代の観衆たちの審美意識に適合した文化を創造しています。例えば桂林の「印象劉三姐」や麗江の「印象麗江」は、各種の舞台表現の科学技術や芸術を十分に動員して、盛大で美しく光輝いた舞台を演出しており、見る人々に文化と芸術の大きな享受を与えます。

これまで述べて来ましたように、今の中国の社会と文化には大きな変化が発生しています。この状況において、中国の人類学の学者は、ただ伝統的な記録、研究を昔のよう

にするだけではだめになりました。それでは新しい時代のニーズにこたえることができないのは明らかです。学者も熟考をして、時代のニーズに追いつき、時代の求めるさまざまな新たな問題や挑戦に答えていかねばなりません。

さて、広西の事業ですが、広西壮族自治区の博物館は、中国の博物館の中で2つの大きな貢献があると思います。広西壮族自治区の博物館は、まず全国に先駆けて文物苑をつくって、動と静の両方の展示方法を取り入れました。もちろん問題はありますが、そのような動と静を結びつけた展示は中国のテーマパークとして初めてです。ですから、雲南の民族村、深圳の中華民俗文化村も、すべて広西の文物苑の影響を受けていると思います。

また、時間の関係で詳しく申し上げることはできませんが、覃溥局長がなされた貢献は、生態博物館の新しい道を示されました。「1+10」の博物館のシステムです。これは大変苦しい時に打ち出されました。これは、貴州の博物館にとっても非常に大きな助けになりました。貴州の生態博物館のシステムにはいろいろな問題があったのですが、広西の取り組みのおかげで随分楽になりました。広西では自治区の民族博物館が全体的に生態博物館を管理するという方式です。

生態博物館の問題は、中国の国家博物館の蘇東海さんたちが、彼らの視点で提案されたものです。ノルウェーと共同で活動されました。彼らの問題点はどこにあったのでしょうか。それは、彼らが博物館の専門家だったということです。ですから、生態博物館にとっては非常に微妙な問題があるということをよくご存じでした。人類学、民族学の方面、また地域社会で仕事をするという意味では、ちょっと足りなかったわけです。しかし、博物館の専門家としては、非常にたくさんの経験をお持ちでした。海外の理論、理念を中国に持ってきた。

貴州の生態博物館については、2つの評価があります。1つは失敗したという評価、もう1つは成功したという評価です。私は、2つとも適切ではなく、偏っていると思います。彼らが中国でこのような文化の保護のための一筋の道を切り開いたこと、前人がなしえなかった事業をしたことはたいへん大きな功績だと思います。では、成功したのかと言いましたら、評価はまた別の問題です。もし貴州の生態博物館に対する評価が高すぎたら、それは事実と合わないだけでなくマイナスの作用も生みだします。このような複雑な事業に対しては、ある意味では成功か失敗かはさほど重要ではありません。参与や過程、探求を重んじ、不断に積み重ね、不断に努力をしていくことこそが重要なのだと思います。およそ物事の発展には複雑な過程がつきものです。ごく短い期間で軽率に成功か失敗かの評価を下すことは適切とは言えません。

貴州が生態博物館を導入し建設を開始する時に中国の専門家とノルウェーの専門家が共同で「六枝原則」を制定しました。この原則の核心は「文化の創造者が自分で文化を管理する」ということでした。しかし、この原則は実現せず、「政府の主導」に変わりました。

した。村民は受動的な地位に置かれました。政府が主導し、専門の人員が管理をし、村民はただ「傍観者」として主体的に参与しませんでした。こうした方式は都市の博物館とどこが違いますか？こうした方式を「生態博物館」と称することができますか？このような結果になったことについて、蘇東海さんもいかんともすることができませんでした。中国で生態博物館を建設することの困難さを知って、蘇さんは理念を変えました。直接西方の国家の方式を移植するのではなく、中国の国情にもとづいて現地化するべきであると。このため、生態博物館を「移植」するときには、まず中国の「土壌」が適しているか考慮し、また移植の操作能力や条件をも考慮せねばなりません。これが貴州の生態博物館が人々に残した経験・教訓であったということが出来ます。

各方面からの批評に対して蘇東海さんは「中国の国情」と「現地化」を弁明の理由として強調されました。胡朝相さんは「コミュニティの住民の民族の民間文化の価値に対する認識は蒙昧な段階にある」と見なしました。彼らはコミュニティの住民が今のところまだ完全に文化の参与者・主人になることができないことを強調しています。このような見方は、彼らが実践を通じて制定した「六枝原則」に対する熟考と修正と見ることができます。この認識の変化は啓発すべき意義に富んでいます。そのことは次のことを人々に問かけるものです。すなわち、生態博物館が西方の発達した国家の「土壌」と「気候」がはぐくんだ非伝統的な新しい博物館文化であって、これを移植するときに果たして被移植地の文化「土壌」がふさわしいもので外来文化の「接ぎ木」をすることに対して十分な認識があったのでしょうか。また、自身、「移植」の操作能力を備えて、移植に際しての諸条件の十分な準備があったのでしょうか。このことは注意せねばならない基本的な前提です。現地の住民は一種の見知らぬ外来文化を拒絶するか受け入れ難かったのであって、簡単に「蒙昧無知」という一言で括ることはできません。また、グローバル化と市場経済の影響下にあって、現地の住民も実際にはつとに想像するような理想的な状態ではなく、各種の欲望を受け入れる共同体に変化していたのです。このことに対して多くの専門家・学者は基本的知識や必要な準備が欠乏していたのです。まさしくこのために文化の操作と方向性は往々専門家・学者の意志によっては変えることができなかったのです。私たちも含む専門家や学者たちは時に熟考する必要があるかもしれません。良心や情熱だけで事をなすことはできません。立ち向かう対象は複雑で、都市の博物館にいては全く想像することができないものなのです。

貴州の生態博物館の評価につきましては2つの点に注意する必要があると思います。提唱者や建設者に対して言いますと、いかなる高すぎる宣伝や賛美も無益で有害です。実情に即してその創設と探求の経験と教訓を正しく深く考えて総括をし、十分に前人の失敗を教訓にする作用を発揮することが、いかなる評価よりも貴重で他人の尊敬を受けられるでしょう。学界に対して言いますと、関心と批評は必要です。しかし簡単に否定することは妥当ではありません。この事業は私たちの民族文化生態村の建設に従事した者と

同様、その困難と複雑さは部外者には想像もつきません。私たちは知るべきです。他者に対する批評は実際には他者の実践から啓発と検証を得る点でプラスになることを。これゆえに「最初に蟹を食べた人」は敬服するに値します。要するに、生態博物館は新しく生まれた事物ですので、その「移植」の実験は短期間には完成しないのです。暫時の成功や失敗はあまり重要ではなく、失敗さえもある程度の成功よりは意義があることもあります。参与や過程、探求を重んじ、不断に積み重ね、不断に努力をしていくことこそが重要なのだと思います。こうした態度をとることで事業の発展の保証がはじめて得られるでしょう。

広西の生態博物館は、貴州での教訓をもとにして、六枝特区でのやり方を変えたわけですね。実際には地域社会での博物館とし、1つのテーマを持った博物館としました。これは、やはり博物館の形式をとっています。なぜそれを生態博物館というのかと言うと、住民を主人公にしなければならないという原則に沿ってやっているからです。しかし、住民が主人公になるのにはまだまだ時間がかかると思います。

雲南はどうでしょう。私たちは、人類学という学問的背景を持っています。地域社会での困難さも知っています。ですから、生態博物館とは呼びません。民族文化生態村と呼んでいます。地域社会で博物館をつくるということは、地元の人にもなかなか理解できないことです。私たちの動機と目標の1つは、文化を守る、文化を伝承させるということ、そしてまた学者の立場から文化の変遷についての研究をも行うということです。

さらに、民族文化生態村をつくる場合、まずみんなに意見を出してほしい。文化を守るにはどうしたらいいか、若者の衣装はどうすればいいのかということを経元の人たちと話し合う中で、いろんな新しい発見があると思います。地元の人たちに、自分から進んで私たちに話しかけてほしい。そして、彼らの提案、希望に私たちもかかわっていく。そういうことが大事だと思います。

民族文化生態村の場所の選択は間違っていないと思います。それをこれからどうしていくかということについて、もし皆さん、希望とか質問がありましたらお出しいただきたいと思いますが、今、とりあえず私たちの民族文化生態村のプロジェクトは終わりました。

私は、広西の生態博物館のモデルは創造性があるって重視するに値すると思います。ただ、あまり自分たちの仕事を増やすのはよくないと思います。では、どこまで作業をするのかということを考える際には、やはり現実をよく見つめなければなりません。大きな声で大きなことばかり言わないで、自分たちのできることを1つひとつ着実にやっていくことが求められていると思います。

雲南の民族博物館では、特徴のある良い展示をしました。服飾もすばらしいもので、創造性のあるものです。今、問題があるとすれば「活態博物館」ですが、広西が「1+10」プロジェクトを提起したのは非常に独自性のあるものだと思います。では、私たち

がまたこれをするということになれば、それほど意味のあることではないと思います。広西の博物館と同じことをしたのでは、意味がないんですね。今、中国の文化資源の保護には多くの問題があります。しかし皆が主体的にかかわっていく必要があります。学者として、博物館として、自分たちの陣地を守らなければならない、自分たちの独自性をしっかり守る必要があると思います。

先ほどの雲南民族博物館の展示はすばらしいと思います。ほかの人にはできません。自分たちにしかできないものです。では、活態博物館はどうでしょう。文化庁の文化遺産を保護する部署がそれに主体的に取り組んでいくことだと思います。

もう1つ、貴州の博物館の李黔濱さんの報告にふれますと、たいへんすばらしい内容だと思いました。異なる角度から私が強調したいことが検討されていました。実際のところ、私たちの博物館は、物質文化に対する調査研究がまだまだ足りません。李さんのこの報告は、貴州の学者がミャオ族について研究しているということ、そして見る人に対してミャオ族の服装の特徴は何なのか、飾りは何なのかを非常にわかりやすく説明しているという点で重要だと思います。このように物質文化について徹底的な紹介をするということがまだまだ足りないと思います。これをやるべきだと私は思います。博物館は、それが本来の役割だと思います。

貴州のこの報告には、曾さんがコメントをされました。確かに曾さんが提起された問題もあります。ここでは繰り返しません。曾さんが提起された問題について私が1つ説明するならば、貴州の学者は、服飾について大変詳細な調査をされている。しかし、学者とその研究対象のミャオ族の服飾のみの関係になっていて、それらをとりまく他者に対する説明、他者への認識が薄いように私は思いました。

もう1つ、貴州の特徴ですが、貴州の服飾のアイデンティティーと発展方向について言いますと、昔、銀は貨幣だったんですね。ですから、ミャオ族が銀を求めることは道理にかなったことだと思います。しかし、ある時期から銀は白銅になった。銀は、自分たちの豊かさを誇示するものであった。しかし、白銅にか変わった。白銅にかわってから、それは富を誇示するものではなくなったわけです。この変化に関する説明をもう少ししてほしいように思いました。

貴州では、少数民族のミャオ族がその服飾を販売するようになりました。彼ら自身のミャオ族の資料に対する研究は、ある意味では私たち学者以上のものです。例えばインターネットを通じて、世界中に自分たちの服飾を紹介し、受注生産したりしております。これによって貴州の服飾が発展してきました。彼らが生産するものの中には伝統的なものとかけ離れた、極論すれば偽物も含まれていることからしますと、それは、本物と偽物の両方を発展させてしまったわけです。

さらにミャオ族は、雲南の至る所に居住しています。雲南のミャオ族は、私たちがこれから研究していくべきものだと思います。ミャオ族は、文化を資源として非常に活用

しています。全世界でこのような前例があるのかどうかわかりませんが、ミャオ族は、物を背負って、どういうわけか私のそばに来ます。私が北京にいと、彼らもいる。私が武漢に行くと、彼らもいる。非常に機動性があると思います。これから私達ちも、ミャオ族を十分に研究しなければなりません。

今日は、このシンポジウムで資源としての文化について議論していますが、いいシンポジウムだと思います。私達ちもこれからぜひ頑張っていきたいと思います。先生たちの報告は非常に貴重なものでした。コメントもすばらしいものでした。時間も過ぎてしまいました。申し訳ありません。

塚田 どうもありがとうございました。尹先生が提示されました観点は多岐にわたっておりますが、午前中からのご発表とそれに対するコメントとも重なる部分があつて、また尹先生ご自身のご経験をも織りまぜながら、大変奥行き深いお話だったと思います。具体的には文化資源の特徴としまして何点かの観点を述べておられました。資源としてどのように文化を保護し活用するのか。その主体はだれなのか。特に政府が主導し企業が参与することが多いのですが、しかし、そこで学者はどうあるべきなのかということにふれられました。また、午前中から提示されておりますけれども、文化資源と市場経済との結びつき、文化の産業化という問題にもふれられました。文化の創造の真実性ということにも言及されました。

ほかに、今日の3名の先生方や李先生の報告に関してもコメントをいただきました。広西の生態博物館の取り組みについて、ご自身が指導的な役割を果たされた雲南民族文化生態村での経験をもとに、地域社会の博物館として、新たな道を切り開いた点で高く評価をするとともに、新たな事業ゆえに短期間で簡単に賛否を下すことのできない複雑な問題があることも挙げられました。李先生の報告につきましては、徹底した物質文化研究の成果を評価するとともに若干の問題点を提示されました。それらのコメントへの答えはまた後ほどに回しまして、続きまして周星先生にコメントをお願いします。

周 周星と申します。愛知大学からまいりました。皆様方の報告、コメントを聞く機会に恵まれ、うれしく思います。

少し尹先生が提起された点に対する補足も含めてコメントを行いたいと思います。そこで、3つの点についてお話をしたいと思います。

まず、最近の中国の文化概念の変化をみると、革命的で、改革開放が始まったころと同じように、現在まさに180度の転換点にあるということを申し上げたいと思います。1919年の五四運動から、中国は文化を革命の対象とするようになりました。つまり、中国の伝統文化は現代化を阻害するものとして大変重要視されてきました。どうして中国は弱いのか、それは、中国は伝統的かつ封建的で文化が遅れているから、と考えられて

きました。ですから、伝統文化を打倒しなければならない、文化を変えなければならない、という方向になりました。

文化大革命の中で、少数民族もある程度の影響を受けました。しかし、中国には少数民族を優遇する民族政策もあり、民族の文化を守るという面では、確かにその時偏見や破壊のあった時代ではありますけれども、漢民族に比べれば、少数民族の伝統文化は比較的守られてきたと思います。

全国的に見ればこの10年間の最も大きな変化は、中国全体の文化に対する概念とか理念が変わってきたことです。政府の考え方や認識も少しずつ変わってきました。その変化の過程ですが、例えば風水は迷信ではないか、ここにどうして学校ではなくて、お寺とか廟を建てたのか、そういうイデオロギー的な認識や理屈など、まだまだありますけれども、全体的に言えば文化を資源と考える見方が、以前とは180度違います。文化は有用なものだ、文化は役立つ、文化は市場経済で開発できる活用可能なものだという考え方です。

最近、また少し変化が見られるようになりました。文化は私たちの富とか生きがいだ、私たちの祖先が残してくれた大事な財産だ、子どもたちに伝えなければならない、これは価値のあるものだ、という認識が起こってきました。

このような現象を通して私が言いたいのは、この変化に特徴があるということです。中国の改革開放は、ある程度の節目にきましたが、国内の利害関係が起こりまして、なかなかうまくいきません。そういう場合は、海外のパワーとか知恵を借りて、国内の問題を解決する方法がよく利用されてきました。例えば、WTOに加盟して国際的なルールを守るということで、自分たちのいろいろな施策も変えるようになったわけです。中国国内の文化の概念を変えるということも、同じプロセスで、例えばユネスコの、例えば無形文化を保護するという国際的な条約に従ってやってきたわけです。

かつて、中国政府の幹部や知識人たちの頭の中にある文化というのは、京劇とかオペラ、映画、バレエとか、あるいは新聞、雑誌、文学とか、どれも文字の形で表現されるものや西洋的なものだけでした。文字の教育を受けた人たちは、文化人・知識人、受けていない人は非文化人だと見なされてきましたが、これが昔の中国的な発想でした。しかし、ユネスコの国際条約に加盟してからは、文化について、海外的なものの考え方が中国にも入ってくるようになりました。以前の中国政府の文化に対する理解や考え方だけでは、ユネスコの文化に対する理念と概念に対応できないということで、近年、このような無形文化を保護しようとする変化が起こりました。

このような変化にも、やはり時代的な背景があるわけです。1つは国際化、もう1つは市場化でしょう。中国はいささか豊かな時代に入りました。ですから、文化について意識が高まったとも言えるでしょう。貧困の問題もまだまだありますが、人々も少しお腹一杯食べられるようになって、文化の中に人生の意味を求めようになりました。こ

数十数年、例えば、春節、旧正月にはさまざまな文化の祭典とかイベントが開催されるようになったし、昔の過ごし方も回復されつつあります。清明、端午、中秋などが国民の祝祭日として認められるようになりました。もちろん、この流れの中で少数民族の芸能などもどんどん発展して、より豊かになってきています。以前は文化を革命の対象としていました。今は、文化を資源として、特に観光開発の分野では文化がお金になる、文化を市場経済で使おうとしています。また、文化を国民の財産と考えるようにもなりました。

では、文化の理解をめぐる混乱は本当に解決済みなのでしょうか、文化を本当にそれほど大事に考えているのでしょうか。私はそうでもないと思います。例えば、博物館の専門家や大学の先生は、「文化とは何？わからない？じゃあ、教えてあげよう」というような姿勢や態度をとりがちですね。文化を語る難しさは、草の根の文化を軽蔑する知識人たちの伝統によるものだけではなく、文化が誰のものか、または誰のためのものか、文化を資源とすると、それは一体だれの資源なのか等々、より根本的な問題もそこにはたくさん存在しています。つまり、その文化を創造した住民の主張や解釈、彼らの文化に対する正当な権利などをまず尊重しなければいけないと思います。

2つ目に、生態博物館について少し私見を述べてみたいと思います。生態博物館は、中国の「文物」に関係している分野のところから出た言葉です。文物（文化財）でいえば、歴史文物、考古文物、革命文物、そして少数民族の民族文物、または民俗文物の概念も次々と生まれてきたわけです。貴州省博物館の元館長はミャオ族出身の幹部で、彼は、文物を民族文物にまで広げたことはごく当たり前で、その中にミャオ族の民族文物があると考えています。では、ミャオ族のもの、文物を一体どう表現したらいいのか、そこから新しい概念、理念が思案されました。つまり、ある典型的なミャオ族の村を探し出し、その村を「民族村」（ミャオ族を代表する村）として、ミャオ族の民族文物の「展示場」だと、あるいは村ごとをミャオ族の文物だと考えたわけです。ミャオ族の英雄、清朝のミャオ蜂起のリーダー楊大六の故郷がその村のひとつです。村ごとを博物館のようにして、ミャオ族の生きている文化をありのまま展示し、それが村寨博物館とか生態博物館になったわけです。「原生态」の生態博物館の理念は海外の影響もありますが、国内の実践から生まれたとも言えます。

しかし、地元の村人にとっては、最初「自分たちは博物館の中にいる。住民たちの暮らしが見たければ見ればいい」と思います。しかし、1人、2人が見ているのだったらいいのですが、観光客の大勢の人々が村人を見に来ると、どうして自分たちは見世物にされなければならないのか、というような意見などから、村の生態博物館に来る客をみんなが歓迎しなくなります。

広西の覃局長も話してくれましたが、文物を博物館に持ってくる場合、有形文化はよくわかりますし、扱いやすいです。しかし、文物・文化財の理念が有形から無形に変わ

る場合、あるいは人間も博物館の展示品のような形になる場合、さまざまな問題が生じます。人間はやはり発展とか変化を求めるものです。人間は欲のあるもので、いい家にも住みたい、よりたくさんのお金がほしいと思うものです。先ほど長谷さんもおっしゃいましたように、他者をどう見るか、他者としての村人も発展、変化をもとめる権利があるはずで。村人を含む生態博物館の実践は、意義のあるものですが、失敗しやすい要因は、現地の住民をどう見るかにあります。生態博物館は結果として、観光スポットに変身します。そこに住む人間さえも原生态の一部として保護する発想には、問題があると思います。

村ごとの文化を資源と考えて開発された観光目当ての「民族村」や生態博物館などは、その利益がどれほど住民に還元されるのでしょうか。数多くのケースから見れば、大半旅游局に持っていかれて、住民たちにたくさんのお金を残す状況ではないと思います。なぜなら、これらの実践が、あくまでも、ほとんど地方政府のプロジェクトのもとでなされているからです。ここでもう一度、もし文化が資源であれば、その資源はだれのための資源なのか、経済だけを発展させるための資源なのか、といったさまざまな問題について考えなければなりません。

いま、文化と資源をめぐる議論は大変活発ですが、たくさんさんの混乱も生じます。たとえば、文物局の立場から言えば、文化は保護の対象であり、観光局の立場から言えば、文化は観光産業の資源であるのですが、ところがいずれも地域住民の表情とか彼らの声を無視しがちです。生態博物館のように、地域の住民を私たちの実験の対象にすべきではありませんし、彼らを博物館の標本と同じように見てはいけません。これが私が申し上げたい2つ目です。

3つ目は、広西、貴州の少数民族を語るとき、私たちが常に何族とか、つまり、まず民族に注目してしまう傾向があることです。これは、地域性の概念への理解があまりにも浅いことから来るのでしょう。謝さんは、雲南文化について、それはたくさんさんの文化が入り混じる鍋の底だという話をなさいましたが、私も、この考えは非常に重要だと思います。中国民族学を研究する学者たち、そしてまたこれらに携わる人たちは、いつもまず民族に注目し、地域に配慮しません。私はまず地域から出発すべきだと思います。

たとえば、麗江ナシ（納西）族の古典音楽、1950年代のころは、麗江古楽とか麗江洞経音楽と呼んでいたのです。つまり、それは民族の文化というより、地域の文化として捉えられてきました。それはナシ族が発明したものではありませんし、ナシ族独自のものでもありません。麗江盆地の他の民族、または隣の大理盆地においても、同じような洞経音楽がたくさん存在していますから。もともと民族音楽ではなく、地域の宗教音楽です。同様のケースとして、トン族の風雨橋もあげられます。これはトン族だけの独占的な文化ではないのです。漢民族もミャオ族もその風雨橋をよく作っています。無意識のうちに省略したのか、意識的に民族のものと強調したのか、よくわかりませんが、私

たちはより地域性を重視しなければいけないのではないかと思います。謝さんは、流域について、あるいは5つの地域の文化について話されました。その地域には、色々な少数民族がいます。ただ、民族だけで地域の文化を語ることができません。例えば、地域で共有する文化などもとても重要なのです。これから私たちはより地域について考えていかなければならないと思います。私たちは、博物館で文物を分類し展示する場合、すぐに民族というのを先に考えます。しかし、地域を無視してしまうと、実際のところ、漢民族の文化とか漢民族の存在すら無視されがちです。少数民族だけに目を向けて、まるで漢民族の文化がないかのような語りは、やはりおかしいですね。これも1つの偏見だと思います。

最後に、もう1点補足ですが、これは曾さんに対する答えにもなるかもしれません。1950年代から70年代に、政府の銀行から少数民族のニーズに応じて、銀の特別配給が行われました。市場経済が始まってから、次第にそのニーズが減ってきて、それで特別な供給も無くなったわけです。かつて、村では銀は富を誇示するものの象徴でしたが、現在ではそれもカラーテレビなどにかわりました。つまり、時代の変化によって、白銀とか白銅の値打ちも下がってきたということです。

以上が私の感想です。ご静聴ありがとうございました。

塚田 周先生、ありがとうございます。中国ではこの10年間に国際化・市場化を背景として文化が有用で資源、国民の財産として考えられる時代に至ったこと、その中で文化が誰のものか、誰のためのものなのか、文化を資源とすると、それは誰の資源なのかといった文化の理解に関する問題点を挙げられました。また、生態博物館に関する問題点を何点か述べられましたが、生態博物館にかかわる人々、特に村人がどのようにかわればよいのかということに関する問題提起がなされました。そこに住む村人を「原生態」の一部と看做して保護することや実験の対象にすることの問題点、利益の住民への還元といった問題だったと思います。さらに、雲南の例をとりまして、民族文化という括りよりも地域で共有する文化、地域性をより重視すべきではないかという問題提起をされたと思います。文化資源が誰のためのものなのかとか、生態博物館にかかわるさまざまな主体の問題は、今日の全体の課題とも深く関わってたいへん注目されます。地域性の重視という新たな問題提起をもされました。生態博物館に関する議論は、また後ほど、それぞれの先生にお答えしてもらおうと考えております。

3番目に、武内房司先生にコメントをお願いいたします。

武内 学習院大学の武内です。今日は大変白熱したといいますか、予想外のいきいきとしたシンポジウムになって、私も大変勉強になりました。

私たちは、民博で文化資源をめぐる共同研究会¹⁾を立ち上げたわけですが、立ち上げ

た当初は、文化資源とって一体何を研究すればいいのか、どういう現実的な意義があるのかがあまりよくわかっていなかった。けれども、今日、中国から来られた先生方、あるいはそれに対する各先生方のコメントを通して、文化資源というものが今日の中国、とりわけ西南中国社会を理解する上で非常に重要なテーマであるということをあらためて認識させられた思いがいたします。

私からいくつか簡単な感想をつけ加えさせていただきたいと思います。

まず、西南中国地域の文化資源というテーマで研究することの意義は、やはり大きいのだらうと思います。つまり、今日のシンポジウムの中でもキーワードとして「多様性」がありますが、中国あるいは東アジア、東南アジア世界を含めて、「多様性」という言葉で象徴される地域は、ある意味では西南中国がまず第一にあげられる。そうした多様性を持った地域、多様性の価値というものをこれからどういうふうに位置づけていくかというのは、人類学や民族学だけではなく、私が専門としております歴史学にとっても、とても重要なテーマであると改めて感じました。

北方民族、モンゴルあるいは満州といった民族については、日本の高校の世界史の教科書でも必ず取り上げられるのですが、ミャオ族やヤオ（瑤）族という民族をあげている教科書はまずないと思うんですね。せいぜい大理、雲南省といった固有名称がある程度で、ほとんど知られていない。けれども、これがいかに大きな価値を持った地域であるかということを掘り起こしていく。私たちだけではなく、中国の先生方とも協力して、そうした魅力や価値を掘り起こしていければ、そしてまた日本の人々にも紹介していければいいなということを、今日の報告を聞きまして強く感じました。これが第1点でございます。

第2点は、各先生方の報告の中で強調されておりましたのは、グローバル化時代の文化資源。特にグローバル化の時代を迎えて危機に瀕しつつある文化資源に対してどう取り組むかということが、共通の問題意識としてあげられていたかと思います。尹先生の最後のコメントの中で、「市場のための文化」という文化定義も大変新鮮に映ったわけです。これは、現在の高度成長下の中国だけで起こっている現象と思われがちですが、実はバブル経済、そしてバブル経済が崩壊した現在の日本においても、ある意味では日常的に進行しつつある事態であって、中国だけを見るのではなくて、日本の現実とも共通しているんだということを認識する必要があるのではないかと思います。

私は歴史をやっておりますが、あまり力がないのですが、日本歴史学協会というのをいろんな歴史学研究者たちでつくっているんですね。その活動の1つのテーマが、歴史的な景観をいかに保存していくか。遺跡あるいは建造物だけではなくて、空間そのものが非常に重要な文化であり、それを継承していくことが大切なんだということを、何度も署名を集めて行政に働きかけているんですけれども、そんなものよりも雇用を創出するために事業を起こして道路をつくるのが大切だと。地方自治体に対して要望書

を出すということをやっているんですけども、これもグローバル化時代の日本が現在抱えている問題であって、そうした虚しさを感じておりました時に今日のお話をうかがいまして、同じ現象が起きているんだなあということを感じました。

ただ、同時に、グローバル化の中で文化が消失するというマイナス面だけを見るのではなくて、残念ながら李先生は参加できなかったわけですけども、今日の李先生の報告を聞きまして、改めて人間の文化的創造力というのは大変なものだなと感じました。つまり、ミャオ族の銀細工、銀飾という文化は、歴史をやっている立場からすると、貨幣経済がすべて銀で一本化された十六、七世紀以降の中国に特有にあらわれる現象である。それは、今のバブル経済にも匹敵するような大変な衝撃力を持った時代であろうと思うんですけども、そういう中でミャオ族の人々がある意味では適応し、自分たちの文化として再創造していく。そういうダイナミズムを感じたご報告で、物事を一面的にとらえてはいけなと改めて感じた次第です。それが、グローバル化時代の文化資源という問題ですね。

第3の問題としては、保存と継承をだれが担うのか、担い手の問題があげられたのではないかと思います。それは、文化を保存するシステムとしてどのような形態が最も望ましいのかということで、覃溥先生の広西壮族自治区における生態博物館の実践的な取り組みのご紹介も大変刺激的なご報告で、多くのことを教えていただきました。

私も、文化資源の研究会で、貴州省の生態博物館の取り組みについて、簡単ですが調べて報告させていただいたことがあります²⁾。もともとはヨーロッパにおけるエコミュージアムという発想。1930年代のフランスで起こった民衆文化再生運動の中で出てきた、建物の中に各地から集めた民具とか収蔵品をただ死蔵し、それを専門家が研究するというのではなくて、先ほど尹先生が「六枝原則」という言葉で表現されましたけれども、住民が主人公となり、過去の物としての遺産だけではなくて、技術あるいは伝承、記憶、こういったものをまとめて保存していくシステムとしてエコミュージアムというものが導入された。

私が非常に驚いたのは、日本におけるエコミュージアムの本格的な導入の歴史よりも、中国のほうが早かった。しかも、実践化し、成功と失敗双方の側面を経験している。これに非常に興味をひかれましたし、新たな文化創造の可能性、いかに文化を伝承していくかという問題についての可能性を持つ試みなのではないかと強く感じたわけですね。

たまたま昨年、私は、貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州を訪問いたしまして、そこにあります錦屏県の隆里という生態博物館を訪れました。ノルウェーから多くの資金が出たということは後で知ったわけですけども、まずその生態博物館という言葉が、私たちの博物館のイメージとは違って、村そのものである、それが非常に新鮮な印象を与えました。単なる日本の観光客目当てのテーマパークともまた違った試みであり、こういう試みが持つ可能性というのは、やはり日本人にとっても非常に刺激的であったとい

うことをお話しさせていただきたいと思うんですね。

そこで、保存と継承の担い手をどこに求めるか。先ほど尹先生が中国国家博物館の蘇東海先生の言葉を引用して、やはり理念は理念として大事だけれども、中国の現実に合わせてなければだめなんだということをおっしゃられたというんですが、その理念というのは、村人にとって現在は辛うじて残っているかもしれないけれども、あと10年、20年、30年たったら失われてしまう。それをいかに記録し、再生可能な形で継承させていくかというのはとても大切な問題で、そのためには、素朴な考え方ですけれども、学者と呼ばれる人々、研究者と呼ばれる人々との協力関係をいかにつくっていくか。

私は歴史をやっていますが、今まで歴史家というのは、自分の研究のために史料が見られればそれで満足。その史料がどういう使われ方をするかとか、村人にとってどういう意味を持っているかということは、あまり考えない。自分の業績になるという考え方が非常に強かったと思うんですね。だけれども、そうではなくて、私たちの努力がいかに村人に役に立つ形で還元できるのか。史料の保存とか修復、あるいは拓本をとって記録するとか、こういったことにお役に立てるような方向性が考えられないか。これは、中国だけの課題ではなくて、今の日本の課題でもあるかと思います。

過去の記憶。記録ではなくて記憶と言ったほうがいいかもしれません。記録と言うと、かつて中国語の「档案」は、裁判のための記録であって、いかに自分たちの権利を守るか、あるいは政治的な革命英雄の業績を顕彰するか。そういうためにつくられた記録とは違う、人々の記憶を将来再生可能な形で残すための取り組みを目指す必要があるのではないかということを感じながら、生態博物館の問題に関するご報告をお聞きました。

その意味でも、広西の生態博物館の試み、野外パーク博物館の試み、あるいは雲南民族博物館の民間の埋もれつつある文書を収集し保存する試みは、とても大切な事業で、私たちが学ぶものが多いと感じた次第です。雑駁な感想ですが、私のほうからは以上です。

塚田 どうもありがとうございました。3人の先生に、それぞれの立場から総合コメントをいただきました。

続きまして、このコメントを受けまして、午前中から出ております議論とも重ねまして、いくつかの問題点を整理させていただきます。

まず、文化資源が非常に重要であるということは、もう十分確認されたと思います。その上で、文化資源をめぐる政府、学者、そして地元の人々のかかわり方、どうかかわればよりよいものができるのかということですね。

例えば尹先生は、先ほど学者がどのようにかかわればよいのかということについてご発言されましたし、武内先生も、研究者と村人との協力関係をいかにつくっていくか、また歴史学の立場から研究者の努力がいかに村人に役に立つ形で還元できるのかという

ことをご指摘されました。また、地元の人々の関わりにつきましては、何人かの先生が指摘されており、例えば周星先生からは、観光目当てのところでは、村人に利益が還元されないような仕組みになってしまったとこともご指摘いただいたと思います。また、生態博物館は、そもそも住民が主人公でなければならないという理念を持っていたこともご指摘されたと思います。尹先生のご指摘では、貴州ではそれは中国の国情に応じて政府の主導する体制に変化せざるを得なくなったのですが、そうした研究者や政府や地元の人々のあり方、それらがどういう関係であればよいのかということが1つ問題点としてあげられると思います。

2番目に、これも午前中から出ておりますけれども、観光業との結びつきという問題があります。呉偉峰先生のご発表の時に、兼重先生のご質問がありましたけれども、いわば商品化されて、もとの民族文化から離れた新たな価値が付与されているのではないかとご指摘でした。もともとのものを忠実に再現したのではなくて、観光用の民族文化として新たな価値が付与されているという現状がある。そして、そのことが観光業として文化の産業化、商品化ともつながります。これが2点目です。

曾先生のコメントでは、文化の真正性についてご指摘をされておりましたけれども、村民のレベルではその文化はどのように解釈されているのか、また商品化されている文化とかけ離れているのではないかとご指摘だったと思います。このような文化と観光との結びつき、あるいは文化の商品化という問題があります。

3番目に、今の問題ともかかわると思うんですけれども、文化の保護や伝承という問題があります。これは、どのような仕組みで、だれがどう扱うのかという問題です。また伝承とともに文化の創造、あるいは文化の再創造といった問題があります。ほかにも、少し飛躍しますが、文化の保護や伝承に関する地元の人々からの積極的な発信ですね。文化はだれのためのものかという問題を考える時に、地元の人々もかかわっているという問題もあります。

3つほど問題点を整理しましたけれども、この問題点を含めながら、中国の3人の先生方にそれぞれご感想なりコメントをしていただきたいと思います。どなたからでも結構です。よろしくお願いします。

覃 まず状況説明からいたします。率直に申しまして、私は今、本物の学者ではありません。文物局の局長です。私は、ちょうど半分の時間は学者をしておりました。最初に博物館の仕事をしまして、都市の博物館の館長をしまして、文物保護の行政の仕事をすることになりました。ちょうど半々の人生です。

今回、この会議に参加して、本当に感動的です。最初に申し上げたいのは、日本の学者が中国の少数民族の研究にこれほど詳しいとは思いませんでした。私が考えもしなかったような質問もありますし、研究もありますし、成果も上げておられますし、本当に

今感動しております。さらに、長期にわたって国内で絶え間なく研究をしておられる、また、海外の学者と研究をしておられる専門家の皆さんのお話を聞くこともできました。ですから、今回の収穫を一言、二言で申し上げることはできません。これから広西の民族文化の保護と活用の仕事に生かしていきたいと思います。本当にありがとうございます。

次に、行政管理の立場から皆様に1つ提案をしたいと思います。この提案が受け入れられましたら、今後、皆さんが研究する上で、政府の担当者、あるいは管理者とも何らかの役割が果たせるのではないか、もう少し科学的な研究ができるのではないかという私なりの提案です。

1つ目は、私の体験です。私は、36年、仕事をしてまいりました。ちょうど半分は、学生、そして学問を終えて、研究者として仕事をしました。そして、もう半分は行政の仕事をしてまいりました。文化という仕事と現実には可能かどうかのバランスをとるということで1つ申し上げたいことがあります。

文化を管理するほとんどの人たちは、もともとは学者です。そして、管理の仕事をすようになりました。私と同じで、彼らは皆、もともと文化の仕事、文化と資源、保護と活用の仕事をしてきたわけです。何をすべきか、現実はどうすべきか、私たちがそうですが、政府の少し責任感を持つ人たちは、そのバランスをとろうと努力します。あるいはあがいているところです。皆さん、ご理解いただけたと思います。私が実際にそうなんです。ですから、私たちがその意思決定に参加する場合、その間でできるだけバランスをとろうと模索します。すべてを求めようとしても無理なんです。ですから、できるところからやっていく、そしてバランスをとっていくというのが、私たちのやり方だと思います。

文化は資源になる、それから最終的にどうなるというお話もありましたが、研究者として、私たち行政の人たちの気持ちをご理解いただきたいと思います。これをまずご理解いただきましたら、いろんなことがわかってくると思います。今、中国は、民族文化について、また雲南や広西や貴州の民族文化の豊かなところで民族文化に対する仕事をいろいろしておりますが、まず私たち行政の人間の気持ちを理解して対応していただければ、私たちがもよりよい方法をとることができるようになると思います。ですから、皆さんもそこはご理解いただきたいと思います。相手の立場に立って、仮にあなたが行政の責任者であれば、文化を資源として保護し活用する場合、どう考えるか。そのように少し相手の立場に立って考えてみることで、私たち中国のいろいろ模索している事情もご理解いただけたと思います。

2つ目に、中国に「国情」という言葉があります。中国では「国情」が慣用語になっています。来日する際に飛行機の中でも「国情」について話し合いました。これは流行語ですが、表面的な意味と内面的な意味とがあります。例えば中国の生態博物館ですが、

私たちは国に1つ課題を提案しました。中国の生態博物館は、やはり「国情」を考えなければなりません。

広西で6年間準備をして、ようやくこの博物館ができました。どうして私たちはそれを1つのモデルケースとしたのか。政府の文化機構、住民が考えたのは、「国情」です。そして、もう1つは広西の地域の状況です。なぜここを選んだか。率直に言って、適当に選んだわけではありません。慎重に選んだのです。

では、最終的にそれは正しかったかどうか。報告でも申し上げましたが、広西の生態博物館は、まだ始まったばかりです。ですから、成功したとは言えません。中国の生態博物館にどのような影響を与えるか、どのような貢献をするかは、今はまだ言えません。しかし、尹先生が私たちの取り組みを評価してくださったことを大変うれしく思います。私も呉さんもこの仕事をしてまいりましたが、本当は私たちもそれほど自信があるわけではありません。でも、100パーセントを求めるよりも、とにかく何かできることからやってみよう。私たちは、そういう考えを持って行動してきました。

多くの学者も、外の文化と民族文化の衝突を経験しなければ、なかなか私たちの気持ちをご理解いただけないかもしれません。生態博物館は、例えば数カ月行かなければわからなくなってしまいます。変化が非常に大きくて速いです。生態博物館の仕事をしてきた村民と話をすることがあります。「ここにこんな家を建てないでとお願いをしたのに、どうして建てたのですか？」と聞くと、「ああ、そうでしたか」と人ごとのように答えるだけでした。とにかく現地に行かないとわからないこと、変化が起きていることはたくさんあると思います。ですから、国情、地域の状況がそれぞれ違います。

中国は非常に豊かなところがあります。その文化の保護は、主体的に、自主的になされています。経済的發展が少し遅れているところは、政府や学者のかかわり、文化機関のかかわりが大事だと思います。私たちは、いずれ住民が主役になってほしいと思います。その時には、その村はきっと豊かになっていると思います。変化するんです。しかし、その変化は、プラスの変化もあれば、マイナスの変化もあります。これが私の2つ目の提案です。何か事業をする時には、そういうさまざまなことがあることをご理解ください。

3つ目は、先ほどお話をいたしましたように、中国の各省の文物局長の中で、私は少し経験を積んでいます。いろんな行政の関係者にも会いました。学者を経験した人としていない人では、役人といっても仕事の仕方、考え方が違います。学者を経験した人たちは、文化を守ろうという学者の立場を考えながら仕事をしています。しかし、学者の経験をしたことがない人は、もう少し私たちに比べて複雑だと思います。私たちは、大きな法律のもとに仕事をするわけですが、やはり変化があります。その変化の中で、いくつかの選択があります。文化のプロジェクトの選択、そして結論もそれぞれ違ってくると思います。

どうして私がこの3つの提案をしたかと言いますと、これは私自身の経験からですが、学者の皆さん、中国の文化を研究しておられる皆さん、長期にわたって努力をしてくださる皆さんから、私たちもいろいろ得たいと思います。ぜひ皆さん、私たちの状況もご理解ください。以上、私が申し上げたい3つです。

さて、今朝、時間の関係で、まだ皆さんの質問に対して回答していないテーマがあります。兼重先生からのご質問だったでしょうか。皆さんに実際の背景をご紹介したいと思います。

例えば貧しいから、発展するために努力をする、何とか現状を打破しようとする。これは経済的な原因ですね。もう1つは、文化を収蔵する博物館は、収蔵品を増やす、展示品を増やす、社会に貢献するという役割も果たさなければなりません。ですから、私たちも資源開拓のルートを探さないといけないのです。

例えば10の生態博物館をワークステーションにしようと考えていたわけですが、今後の広西博物館の収蔵品はどこから来るのだろう。社会は発展し、変化する。では、私たちのまったく新しい、基盤のない広西の生態博物館は、この先どうすればいいのだろう。4,000点ほどの収蔵品がある。きょう、皆さんに3万平米の場所があるご紹介しましたが、そこで展示するためには、まだまだたくさんの仕事をしなければなりません。ですから、生態博物館をつくる場合、運営する場合、今も大事ですし、これからのための基盤づくりもしなければならぬと思っています。私たちのワークステーションには、いろいろな仕事の仕方があります。中国あるいは外国の学者の人たちに、可能性の調査やテーマの研究をしてほしいと思いますし、ぜひ皆さんに来ていただきたいと思います。

生態博物館は完成したけれども、いろんな問題がまだ山積みです。例えば政府の各部門の生態博物館に対する態度ですが、中国の行政は、今、いい方向に向かっています。人民代表大会で非常に重要な問題、政府機関の問題について話し合っているわけですが、旅遊局、文物局という行政の部門が、ひょっとしたら将来は文化遺産部という機関になるかもしれません。そして、建設部が今管理している歴史景勝地、また無形のものも、ひょっとしたらその部署に入るかもしれません。

つまり、今、現実的に新しい提案がなされているわけです。それぞれが自分たちの仕事をする。中国の社会は、世界の発展とリンクしています。中国が国際社会とリンクしていればこそ、今のやり方ではだめなんです。中国は変わらなければならない。生態博物館は、文化部門が関心を示す問題だけでいいのか。そうではありません。私たち発展改革委員会も、財政部門も、また旅遊局も、文化庁も、みんながこの問題について関心を示しています。そして、それを自分たちの仕事の一部にしようとしています。自分たちのできるところから、この文化の発展のために役割を果たそうとしています。いずれにしても、まだ始まったばかりです。お互いにいい意味で影響し合うということですね。

広西の生態博物館の経費は、ほとんどすべて広西自治区の経費です。発展改革委員会の支持がなければ、私たちはこれをやっていくことはできないのです。私が強調したいのは、国情と地域の状況です。これは、生態博物館が避けて通ることのできない道です。

17年前、私は学者の立場から呉館長にも話したことがあります。これは私の見方で正しいかどうか分かりませんが、博物館について私はこう思います。仮に今のこのような状況で発展させるならば、中国の生態博物館の発展の可能性は2つある。1つは、最終的に伝統的な博物館に戻るということ。私は、今、中国の博物館を中国の民衆に無料で開放するという文書を用意しているところです。現状を見れば、いろんな現実が見えてきます。中国の政治体制の問題や、これからの問題も不透明です。ただ、これらのものがなくなれば、博物館もなくなってしまいます。先ほどの武内先生のお話に私も同感です。なくなってしまうかもしれません。しかし、100パーセントなくなるということはありません。100パーセント伝承されるということもありません。

2つ目は、状況がよくなれば、今の中国の生態博物館の目標として、現地の住民が博物館の半分を支えるということが挙げられます。100パーセント主人公になることは無理です。半分支えてくれればいいと思います。自分のこととして博物館の運営に参加してください。50パーセント参加してください。そうなれば十分だと思います。

10カ所の生態博物館は、それぞれ条件も状況も違います。例えば那坡の博物館は、私たちは呉館長と何度か行きましたが、場所を選ぶ時、本当は心配でした。しかし、地元の人たちが非常に後押ししてくれました。今、彼らは、非常な力で参与してくれています。この展示センターや素材は、すべて現地の住民が準備をしてくれています。また、客家の博物館も、現地の住民が自主的に組織をして、私たちの文化部門と連絡を取り合い、彼らの土地や建物を提供してくださっています。また、ある漢民族の博物館もそうです。ですから、いい面もあります。100パーセント主人公というわけではありませんが、住民の参与はどんどんよくなるのではないかと思います。

それぞれの博物館に文化のモデル基地をつくっているわけですが、私たちは指導性を発揮します。例えば三江の農民が描いた絵、木工、刺繍、これらはすばらしいものです。彼らの展示は、すべてが自発的です。自分たちが主体になって、自分たちの家の中に絵を飾ったり、酒造りも自分たちが主体となってやっております。ですから、それぞれ博物館によって状況は違います。

いずれにいたしましても、短期においては、尹さんがおっしゃるような主人公になるというのは無理です。しかし、学者や行政がしっかりとこれをうまく運営していけば、長い目で見れば可能性があると思います。

さらに、利益についてですが、私たちは経済的な利益はそれほど求めてはおりません。農民は、そのほかに自分たちの利益を得る方法、ルートがあります。観光によって利益を増やそうということは、あまり考えないほうがいいと思います。それは、ある程度自

然に任せたほうがいいと思います。交通の便もよくなります。また、見学する人たちも、交通の便がよければ、なにもそこに泊まらなくてもいいわけです。ホテルがあってもなくてもかまわないわけです。便利になれば、来たり帰ったりできるでしょう。今、一番遠い生態博物館は、金秀瑶族自治県の村にあります。でも、今は交通の便がよくなりましたから、それほど時間がかかるわけではありません。町まで30分で行けます。もともとは大変遠いところだったんですが、政府がいろいろな仕事をする事で、悪いものもよくなってくると私は思います。

博物館は、現地の住民に、例えば交通の便をよくしてきました。都市から離れている博物館も、今は交通の便がよくなりました。2つ目には、現地の住民の生活環境もよくなりました。生態博物館ができたために、国際赤十字社がその環境を悪化させない政策をとるようになりました。3つ目は、水です。このあたりの住民は、ずっと水道の水が使えませんでした。今は博物館ができたことによって、住民は水道の水を使うことになりました。これは、彼らの健康にとっても非常によいことです。以前は、水の問題で随分苦労しておりました。いろんな病気もしていました。これは彼らの衛生にいいことだと思います。

では、これぐらいにしましょうか。私は、今、学者ではないので、間違った点もあるかもしれません。うまく話せなかったかもしれません。いずれにしろ、今回来て、実際にこんなふうに感じました。ありがとうございました。

塚田 ありがとうございます。文化を保護し、それを伝えるため、大変注目されております生態博物館の試みにつきまして、補足説明を加えながら、住民が少しでも参与して生態博物館を支えてほしい、さらに国情や地域の事情を踏まえながら、できるところから一歩ずつ努力していくという姿勢がひしひしと伝わってくるお話でありました。私も、そのことについては大変共感を持つことができますし、生態博物館の今後の発展を注視していかなければならないと思います。

続きまして、今までの議論を踏まえて、謝沫華先生にご感想なりご意見をお願いいたします。

謝 時間に限りもありますので、できるだけ短く話します。今日、文化の保護について語り合いました。民博は「深奥的中国」という展示を行いました。これを見て、中国から来た少数民族として、私は白族ですが、感動いたしました。

文化の保護について、中国には中国の国情があります。覃さんがおっしゃったことは、私も同感です。1960年代の文化大革命以後の文化に対する見方の変化は大変重要なものです。具体的な例をあげてみましょう。最近、中国の政府は、省と市の博物館、国立の博物館をすべて無料で開放すると決めました。しかも、最近国際的な影響もありまして、

皆さんご存知だと思いますが、中国では世界遺産に登録するのが1つのブームになっております。1つは保護、1つはそれによっていろいろな利益が得られるということです。

文化の保護を機構の面から見ますと、少し複雑なものがあります。例えば雲南と広西では、広西はうまくやっています。文化庁の下に民族博物館、いろんな博物館があります。私たち雲南は、多様性がありますから少し特殊なのかもしれません。大きいものは文化庁が、私たち雲南民族博物館は民族事務局がやっております。雲南には26の民族があります。ですから、これも私たちの特殊性と言わざるを得ません。他省とは違うんです。

私が今日紹介したのは、あくまでも雲南のここ数年の文化の保護についての簡単な紹介でした。尹さんがおっしゃいましたように、博物館は伝統的なものを記録していかなければならない。こちらの民博のようにたくさんの資料を集め、それを記録したり、記憶したり、展示しなければなりません。私は、とにかく生態博物館さえつくればいいという問題ではないと思います。そういうものを記憶し、記録しなければなりませんと思います。

では、私たちはどうして雲南民族博物館をつくったのかということですが、第11次5カ年計画の中で、少数民族地域では民族あるいは民俗博物館をつくらないといけないという決まりがあるわけです。人口の比較的少ない民族も、それぞれ自分たちの博物館を持たなければなりません。国がそう決めたわけですから、地方もそうしなければなりません。そこで雲南は、人口の比較的少ないところで博物館をつくらうと考えました。

これは中央の民族事務委員会が決めます。省区の政府機構が提案をします。雲南、貴州、広西は、さまざまな提案を出しました。これはあくまでも提案です。というのは、現地が管理し、そして国が資金援助をするわけで、私たちはただ提案をただけです。私たちは、省に対して、ああだ、こうだと言える立場にはありません。ただ平等な提案をいたしました。いずれにしても、民族博物館としては、収蔵、展示、研究が主な仕事だと私は思います。

展示「深奥的中国」を拝見いたしました。それそのものが文化の記憶です。展示物のなかには今は少なくなったものが多くありました。例えば銀飾り。曾さんもおっしゃいますが、私たちもそう思います。民間の技術は、非常に価値のあるものです。しかし、放っておけば、それはなくなってしまうかもしれません。博物館としては、それを記録しなければなりません。政府として、できれば彼らを手助けして発展させ、継承させていかなければならないと思います。

私の考えですが、先進国の日本や韓国から学んだことですが、中国の民族、民間の技術を持った人を、国家級の民間技術者、あるいは省の技術者に認定して、多くなくてもいいですが、例えば数千元の人民元を国あるいは市の行政から提供する。政府がそのような補助をすることによって、彼らは銀飾りの技術を継承させていくことができると思

います。国レベル、省レベルの伝承者という認証をして、資金援助をすることが大事だと思います。そうでなければなくなってしまいます。

社会と経済の発展によって、世界はまだ多様的です。しかし、私たちは、今日ここで皆さんとともに国際シンポジウムを開いています。皆さんからいろんな意見をうかがいました。これは1つの文化のぶつかり合いです。尹さんがおっしゃいましたように、失敗した、あるいは成功したとどちらかに断言できるものではありません。しかし、社会の発展の中で、文化の伝承、保護、活用について、私たちは努力して博物館の仕事を続けていかなければならないと思います。間違いがありましたら、どうぞ皆さん、ご指摘ください。

塚田 謝先生、ありがとうございました。博物館という装置もまた、文化資源を保存し、記憶し、記録するということで、大変重要な役割を果たしていること、そして、これからもそれを続けて一層発展させていかなければならないということを、改めて私も確認させていただきました。

続きまして、呉偉峰先生にご意見、ご感想をお願いいたします。

呉 文化と観光について、少し補足させてください。朝、発言した、それについての補足とお考えください。

博物館というのは、博物館自身の発展の法則性に従って仕事をしていかなければならないと思います。博物館の運営は、科学です。私たちのような人間は、博物館の専門性を重視しなければなりません。博物館と言え、博物館なのです。私たちは、世界のいろんな博物館に行き、進んだ経験をたくさん学びました。日本の民博からも学びました。来るたびにできるだけ多く学ばないといけないと思っております。文物を保護するための進んだ技術を学びました。研究者が極めて高い成果を上げています。本当にいろいろ勉強になっています。博物館の一番大事なことは、商業ではありません。文化を守ることです。

次に、私たちの屋外の展示の内容は、あくまでも博物館の一部分です。これが博物館の全体ではありません。今朝、文化産業についてもお話ししましたが、私は、屋外に展示している内容、そして文化産業としての活動をご紹介したいと思いました。

3つ目に、博物館は、より多くの観衆を魅了するものでなければならないと思います。今、私たち広西の博物館は、それほどたくさん来てもらっているとは思いません。1年に十数万、20万です。博物館の機能は、展示することです。そして、その展示したものをしてくれる人がいなければ、博物館がそこに存在する意義は薄らいでしまいます。

ですから、博物館の機能をよく考える。収蔵する、保管する、展示する、研究する、宣伝する、広告する、教育する。そして観光と結びつける。こうすると、魅力的なもの

ができ、観衆を呼び込むことができると思います。したがって、やはり観光業と結びつけること、産業と結びつけることも大事だと思います。今の基礎をもとに、私たちのサービスの範囲を広げていきたいと思っています。

さらに、博物館の収益を博物館事業の運営に生かしていきたいと思っています。私の論文を見ていただきますとわかりますが、国内あるいは海外の有名な学者に来ていただきまして、中国の民族文化を研究していらっしゃる方たちに、文物苑で講座を開いていただく。社会に開放された無料の講座を開きたいと思っています。また、広西の地方の伝統的な工芸品を展示したり、あるいは形に表れたものだけではなく雑技とかサーカスとか、そういうものも皆さんにお見せしたいと考えています。つまり、社会に奉仕する、民衆に奉仕する、それが私たち博物館の仕事だと思います。

塚田 呉先生、ありがとうございました。博物館の展示以外のさまざまな社会的なサービスの重要性があらためて再認識されるところです。

さて、本日は、中国の少数民族の文化資源をめぐる議論、とりわけその最前線に立られている諸先生方が、その現状と具体的な取り組みに関しましてさまざまな問題点を提示され、活発な議論が行われました。西南中国の民族文化、文化資源を見直し、さらにより深く掘り下げていくためのよいきっかけになったかと思っています。

いろいろな先生がご指摘されましたように、いろいろな問題はすぐには解決できない。どういう問題点があるのかということは、今日、この場で皆様と共有することができたと思うんですけども、すぐには解決できない。やれる範囲の中で一歩ずつ前進していくことが大変重要でありますし、そのために議論をすることも重要であります。今日は、国境を超えた議論、日本と中国の研究者の間で文化資源に関する議論ができて、大変有意義なシンポジウムだったと思います。

最後になりますが、本日発表されました3名の先生、覃溥先生、謝沫華先生、呉偉峰先生、及び総合コメントをされました尹紹亭先生、周星先生、武内先生、さらにコメントをいただきました皆様に衷心より感謝申し上げます。

これをもちまして、本日のシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。皆様、どうもありがとうございました。

注

- 1) 民博共同研究「民族文化資源の生成と変貌—華南地域を中心とした人類学・歴史学的研究」、代表者 武内房司、2006-2009年。
- 2) 武内房司「文化資源と歴史景観—雲南・团山村“漢彝合璧”古村落建築群と貴州・隆里郷」（口頭発表）、民博共同研究 2007年度第2回研究会、2007年12月1日、於国立民族学博物館。